

現地調査報告(北海道)

- 1 美晴幼稚園 (札幌市)
- 2 恵庭幼稚園 (恵庭市)

1 美晴幼稚園 (北海道札幌市)



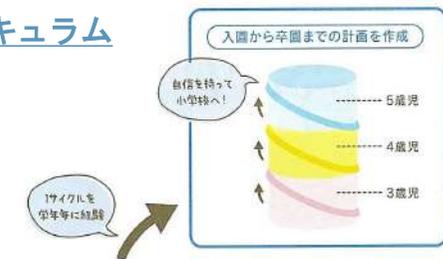
学級編成

3クラス (3～5歳児の異年齢構成) 各30名 計90名 (定員)

活動に応じ学齢グループ編成

0～2歳児保育 保育園が近接 定員19名

カリキュラム

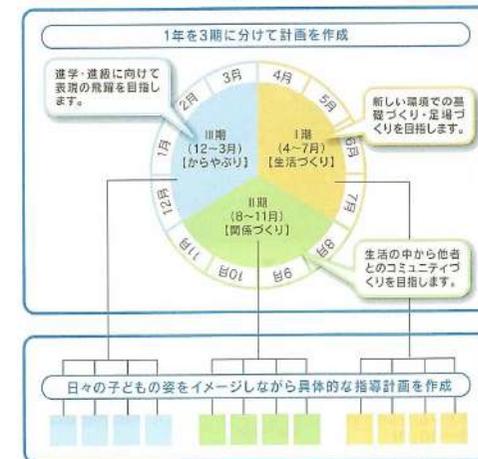


保育目標

多様な子ども集団 直接体験と情動体験 可塑性のある保育

主な特徴

- ・ 各学年を1サイクルとした、らせん状に構成されたカリキュラム
- ・ インクルーシブ教育の推進
- ・ 豊かな自然環境の中での遊び



施設概要

美晴幼稚園

昭和39年築 平成7年改築
RC造2階建て 延べ677㎡

こぐまの森プレイホールガリバー

平成15年築
RC造2階建て 延べ230㎡

こぐまの森プレイガーデン

3000坪の傾斜地を含む雑木林の敷地
プレイホールガリバーが立地

本園での活動の他に、プレイホールガリバーや
プレイガーデンにおいて、四季を通じて自然との
関わりを持てる環境をつくっている。



美晴幼稚園



プレイホールガリバー

施設の特徴(プレイホールガリバー・プレイガーデン)

○インクルーシブ教育に対応する施設の在り方

○幼児の主体的な活動を促すための屋外環境



▲プレイホールガリバー
森に溶け込むように両面をガラス張りとし、内部は木質化している



▲プレイホールガリバー裏手の雑木林



▲障害の有無に関わらず、豊かな自然環境での遊びを通して、危険を回避する力を身につけていく



▲こぢんまりとした2階部分
メリハリのきいた空間により多様な使い方が可能となっている



▲プレイガーデンの一部にある菜園では、生活の一部として四季や自然を体験できる



▲遊び方の決まっていない遊具では子供が自ら遊びを考え、学んでいく

施設の特徴(プレイホールガリバー・プレイガーデン)

- 家庭や地域との連携・協働を促す施設
- 教育活動を支えるための職員スペースの在り方



▲プレイホールガリバー
演奏会を行うなどの地域との連携にも対応できる



▲プレイガーデン
子供の日常的な活動だけでなく、様々な人との交流の場となる



▲自作の遊具で遊ぶ子供
この遊具は卒業生や保護者によるもの



▲普段は床下に収納されているテーブル
可変性のある家具は、空間の使い方に幅を持たせる



▲ガリバーに近接する保育園内の事務スペース
職員や保護者が集える

委員コメント（教育面や施設面の工夫・取組）

- ・敷地内に十分な園庭が確保出来ない事から2km程離れた場所に子供達が自然に沢山触れたり、身体を動かす事の出来る場所を確保している。
- ・子供達の過剰な安全性を気にするあまり、多様な経験が出来なくなる事が多い時代の中で、小さな怪我をする事も成長へ繋がるという信念のもと、様々な遊び場が提供されている。
- ・既成遊具は無く、全て手作りの物が子供達に提供されていた。
- ・こぐまの森が、まさに自然との触れ合いの場、自分たちで遊びを考え出す場となっている。
- ・畑、花壇、実のなる木、がけなどが多様な体験を誘発する。固定遊具はないので、自分たちで工夫して遊ぶことになる。足に装具を付けた特別支援の子どもが、教師の援助を受けながら、急こう配のがけを登ろうとしているのが印象的だった。特別な訓練ではなく、子どもがしたいと思ってチャレンジしたことが、結果として身体能力を高めることに役立っている。
- ・0～2歳の小規模保育園もあり、普段は0～6歳の子どもが交流できる。また、卒園生プログラムがあると小学生の子どもも活動する拠点となる。小学生の活動を引き継いで、幼稚園の子どもが活動を展開するなどしていた。幼小のつながりを大事にしている。
- ・ガリバーハウスが秀逸で、建築には素人だが、大変面白い構造であると感じた。ここの机は、掘りごたつ式で、必要なときに必要な数だけ机を出すことができる。たたんでしまえば、広くホールのようにも使える。また、様々な地域の行事、コンサートなどにも使われていて、集会所(カフェ)も作られている。地域とのつながりが形になっている。

委員コメント（教育面や施設面の工夫・取組）

・幼児教育施設においては、子どもたちと直接かかわる時間と同等に、教職員が子どもたちの指導についてコミュニケーションをしっかりと取る時間と空間が必要である。そのための時間と空間の重要性があまり理解されず、子どもたちをただ預かるだけの空間という発想で施設を作っている事例が少なからず見受けられる。北海道の2園では、職員室や休憩スペースなど子どもたちの前で教職員が最高のパフォーマンスをするために必要な休息やリフレッシュをする空間、教職員間でよりよい連携をとって指導をするための幼児理解や指導方法などの打ち合わせをする空間づくりと設備について環境を整えることに力を入れていることが、今後の施設整備に対して大きな示唆を与えている。ぜひ、参考にしたい環境である。

・2園ともある程度自然環境に恵まれているものの、子どもたちの育ちを考えてよりよい環境を求め、自然を取り入れたたり、種をまいて育てたりする取り組みを続けて園の自然環境を豊かに変えている。規模の大小はあっても、どの園でも発想としては大事にしたいことである。

・ここに行けば、自由に絵を描いたり、物を作ったりできるアトリエや工房のような空間があることは、子どもたちだけでなく、教師にとっても想像力や創作意欲を高め、心が揺さぶられる体験をしたとき、すぐにそれを表現する行動につながることに効果があると思われる。

・保護者が送り迎えの際にちょっとくつろいだり、教職員や保護者同士で話したりできる空間があり、これは子育ての支援にとって非常に重要な意味をもつ施設整備である。通園にかかわる安全を考えると、自転車やベビーカー置き場などの空間が確保できないなど、非常に危険な園が多いと思われる。各園において事情が異なるものの、安全に関してはある程度の広い空間が求められる。

2 恵庭幼稚園（北海道恵庭市）



教育プログラム

遊（よく遊ぶ子は、よく育つ） 食（食を通して学ぶ“生活”と“文化”） 智（知と智“学びに向かう力”）

教育カリキュラム

教育内容	遊ぶ	学ぶ	育つ
	3歳(年少)	4歳(年中)	5歳(年長)
	自立と自我の芽生えを培うために遊び込む	生活と想像の基礎基本を繰り返し学ぶ	自分たちで生活を創り、豊かな表現力を培う
活動スタイル	遊び込み(自由遊び)	遊びと習得(設定保育)	自ら動く(アクティブラーニング)
学級編成	17～18人(4クラス)	23～24人(3クラス)	17～18人(4クラス)
教員体制	チーム保育(学年8人)	担任制(1クラス2人)	チーム保育(学年5人)
教員配置	園児9人につき1人	園児12人につき1人	園児15人につき1人

施設概要

昭和60年築 平成21年改築
RC造2階建て 延べ1645.16㎡

そのほか、施設の整備費を徴収し、毎年
少しずつ改修を行っている



施設の特徴

- 思考力や判断力、表現力、多様性、持続力、探究心等を育てるための屋内環境の在り方
- 将来の変化に対応する施設整備の在り方



▲毎日のスケジュールはボードに書き出し、
子供は自分でそれを見て自主的に行動する



▲保育室に設けられた学習コーナー



▲馬蹄型に並べた可動式の椅子兼棚は用途に
合わせて様々な使い方が可能



▲壁に課題とやり方を記載した紙を貼り、興
味を持った子供は自ら読み取り学習できる



▲大人用便座と子供用便座両方を設置



▲保育室の床に収納できるテーブルを設け、
用途にあわせて活用している

施設の特徴

- 家庭や地域等との連携・協働を促す施設整備の在り方
- 教育活動を支えるための職員スペースの在り方



▲保護者も集まれる玄関脇の暖炉を囲むミルルーム



▲電子黒板を活用した学習は、教員の仕事の省力化にも役立った



▲園内に設けられた休憩スペース



▲広々とした職員室はガラスの扉で中の様子がよくわかる

施設の特徴

○幼児の主体的な活動を促すための屋外環境の在り方



▲子供が自ら土をいじって道を作り、遊びを創造する園庭



▲夏の間、園庭に重機で穴を掘り、ビニールシートを敷いてプールにし、秋が来たら埋め戻す



▲園庭の段差や石も子供の遊具であり、遊び場でもある



▲植物のつるも子供にとっては遊具と同じ



▲遊具にははしごがなく、縄や板を伝って上ることで自然に体力をつけていく



▲田んぼや畑でとれたものを食べることで四季や生活に根ざした“食”を経験できる

委員コメント（教育面や施設面の工夫・取組）

・教育課程で示されているように「3歳児は徹底して遊びこむために保育室を特定しない」「4歳児はクラスとしてのまとまりを」「5歳児は、クラスはあるが、それを超えて小グループでの活動が出来るように」室内及びトイレの設えを子どもの発達状態によって変えている。これこそ、教育理念・方針に沿った園舎計画である。事務室も外から全部見えて大人が仕事をしているのがわかる、トイレも廊下にオープン、広い和室、掘りごたつ式収納可能な机、熱量が目に見える薪ストーブ、普段から使用できる非常用スロープ、U字の移動可能な収納も兼ねる3段の組み立て式座席、電子黒板（教員に持たせるipadと繋げる、教員の仕事の省力化も）など、理念に裏打ちされた創意工夫の見られる空間であった。

・園庭は、木登りのできる樹木、花の咲く木、果樹、そして落葉樹・常緑樹など変化に富む植栽があり、常設のプール（水がない時は、カプラやレゴの場所にも）、夏場には園庭を掘り起こして創る大きなプール、花壇・畑・水田、小川もあり、飲料にもなる井戸の水も十分に使える。子どもたちが自然に関わって自ら探求できる環境がある。また、36の基本動作がまんべんなく体験できるような仕掛けがあちこちに施されており、子どもが知らず知らずのうちに身体を動かすことができるようになっている。これらは、園長や教員たちが、常日頃、研究的に保育実践を重ねているからこそできることだと思う。

・訪問時には、教員の休憩室が作られているところであった。保育所では職員の休憩室を見かけることがあるが、幼稚園ではなかなか見られないことであり、今後、幼稚園教諭の働き方を変え、長く勤務して経験を積み、研究的に保育を振り返り、質の高い教育が出来る教員を育てていくことに繋がると考えられる。

・就園前の乳幼児と保護者向けの子育て支援と学童保育も兼ね備えた、0歳から10歳までの子どもの育ちを保証するシステムになっていることは特記すべきである。

・保護者との連携(特に父親)も活発である。

・園庭は季節毎に重機で掘り起こして池を造成するなど、絶えずリノベーションしながら整備している。

・避難器具やテラスを有効に使いあそび場を構成している。

委員コメント（教育面や施設面の工夫・取組）

- ・井戸と井水を園庭全体に活用し、植栽を豊かにし水田や動物の飼育にいかしている。
- ・2歳児からの学齢別の保育を基本とし、3歳児は保育室を固定せず3室を全体で使用している。4歳児は意識的に保育室を固定化して使用している。5歳児は保育室を配置しつつ、和室や家具を工夫してコロセウム式の保育環境を実現している。
- ・玄関横に職員室を配置し、全面ガラス張りで職員が仕事している様子を見られるように設え、広い玄関ホールや廊下の壁面を利用し、保育の様子を保護者や来園者に伝える掲示を行っている。
- ・玄関ホールにまきストーブを設置しコミュニティースペースとしている。
- ・夏休みを利用し職員の休憩室を整備する改修工事をおこなっていた。
- ・園長が就任した頃は園庭に樹木が一本も無かったとの話だが、そこから木を植えて少しずつ緑豊かな環境にしてきた。
- ・夏場には園庭に重機で大きな穴を掘り、ブルーシートを張り、水を張る事で子供達が思いきり水遊びができる様に工夫をしたり、井戸水を手押しポンプを使って汲み上げ、それを水遊びに使ったりして、子供達が遊びの中から知識や経験を得て、協調性を得たり出来る様になっていた。
- ・保護者が送り迎えの際にちょっとくつろいだり、教職員や保護者同士で話したりできる空間があり、これは子育ての支援にとって非常に重要な意味をもつ施設整備である。通園にかかわる安全を考えると、自転車やベビーカー置き場などの空間が確保できないなど、非常に危険な園が多いと思われる。各園において事情が異なるものの、安全に関してはある程度の広い空間が求められる。
- ・トイレがきれいで、保育室や職員室からよく見えるオープンな空間である。年齢に応じてその誂えも考えられており、子どもたちの自立を促しつつ、教師側の援助もしやすい配慮がされている。